

資 料

青年期における独立意識の発達と自己概念との関係

加 藤 隆 勝*

高 木 秀 明*

青年期における依存から独立への過程の解明は、青年研究において中心となるべき課題の1つとされている。しかし、独立性は人格全体の発達にかかわる総合的概念であるため、これを客観的・数量的にとらえることは難しい。このため、課題の重要性にもかかわらず、独立への過程がいわゆる実証的レベルで十分解明されてきたとはいえないのが現状である。

本研究では独立意識の測定を試みるが、独立意識についてはこれまで比較的研究が多く、方法上も幾つかの工夫がなされている。たとえば、進学、就職、結婚などの場合、誰の意見に従うかを質問し、親の意見に従うもの、自分の意見に従うもの、などの割合の分析を通して独立意識の発達程度を推測する方法(久世, 1958)が用いられている。また、父、母、友人、教師などの依存対象に「自分」も加え、困った時に誰に頼ろうと思うか順位づけさせ、依存対象の相対的順位の変容を通して独立意識の発達過程を跡付けようとする試みもなされている(鈴木, 1936; 加藤, 1977)。これらの方法は、それぞれ独立意識の重要な側面を把握するのに有効であるが、独立意識を構成する内容の分析までには至っていない。

また、高橋(1968)は、依存から自立への変化を、依存の単なる否定とみるのではなく、依存要求により生起される依存行動を年齢、能力、場などにふさわしく発達変容させていく過程とみる立場に立ち、質問紙や文章完成法を用いて女子青年における依存性の特徴を明らかにしている。高橋の研究は、自立(独立)への過程を依存性の発達を通して明らかにしようとしたもので、依存性と独立性を両極的、対立的に扱ってきた従来の立場に新しい視点を導入したものといえる。ただし、この場合も独立性を直接的に調査したものではないので、独立意識の構成内容が明らかにされたわけではない。

本研究は、以上の諸研究をふまえた上で、次のことを目的として実施されたものである。(1)青年の独立意識の構成内容を分析して、その測定尺度を作成する。(2)作成した尺度を用いて、青年期における独立意識の発達の変

容を明らかにする。(3)独立意識は自己意識の形成過程と関連をもつと考えられるので、独立意識と自己概念の関係を検討する。

調査Ⅰ 独立意識尺度の作成

目的 青年の独立意識の構成内容を分析し、それに基づいて、独立意識の測定尺度を作成する。

方法 従来の関連した研究(高橋, 1968など)や青年心理学書の記述を参考にしながら、青年期における依存から独立への過程を表現する37個の短文を選定、作成し、これを予備調査項目として中学、高校、大学生に実施した。その際、各項目ごとに「全く自分にあてはまる」から「全く自分にはあてはまらない」までの5件法で回答を求め、それぞれの回答に対して5点から1点の得点を与えた。調査対象は茨城県内の中学生122名、埼玉県内の高校生109名、茨城県内の大学生86名、合計317名である。調査期間は1978年6～7月である。

結果と考察 調査結果を中学、高校、大学生別に主成分分析を行い、さらにバリマックス回転を行ったところ、それぞれがほぼ同一の因子構造をもつことが確認できた。そこで、中学、高校、大学生をまとめた全体について主成分分析とバリマックス回転を行って3因子を抽出し、これに基づいて3尺度20項目(5件法)から成る独立意識の測定尺度を作成した。各尺度を構成する項目の選択に関しては、因子負荷量の絶対値が.40以上を基準とし、内容の類似した項目がある場合には、その中から1つを選択するようにし、中学、高校、大学別の因子分析結果をも参考にして決定した。最終的に選択された項目は、尺度Ⅰ10項目(項目1, 4, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 17)、尺度Ⅱ5項目(項目20, 21, 24, 25, 26)、尺度Ⅲ5項目(項目28, 30, 32, 33, 34)である。TABLE 1に各項目の番号および因子負荷量を示す。尺度Ⅰの項目は自己の独立性、尺度Ⅱの項目は親への依存性、尺度Ⅲの項目は独立への移行や独立の芽生えに関係した反抗や内的混乱、を表現していると考えられるので、尺度Ⅰは「独立性」の尺度、尺度Ⅱは「親への依存性」の尺度、尺度Ⅲは「反

* 筑波大学

TABLE 1 各項目の因子負荷量†

項 目	因 子			h ²
	I	II	III	
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	-.71	.00	.09	.51
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服できると思う。	-.60	-.03	-.05	.37
3. 自分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	-.60	-.10	-.02	.37
4. 自分自身の判断に責任をもって行動することができる。	-.60	.07	-.11	.37
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	-.59	-.11	-.12	.38
6. 人の意見もよく聞かすが、最終的には自分で決断できる。	-.59	-.03	-.16	.38
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	-.58	.13	.06	.35
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	-.54	-.02	-.12	.31
9. 小さなことでも、自分で決断することができる。	.52	.10	.29	.36
10. 自分の意見を言わずに、相手に従ってしまうことが多い。	.50	.09	.29	.35
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	-.50	-.05	-.03	.25
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	.48	-.06	.27	.30
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	.46	-.07	.11	.23
14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.42	.04	.15	.20
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(がまんしたり、調節したりする)ことができる。	-.39	.12	-.17	.20
16. 自分の考えや行動をおさえられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	-.39	-.03	.11	.16
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。	-.36	-.05	-.02	.13
18. 親にさからえないで、言う通りになってしまいやすい。	.31	.24	.09	.16
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	.24	.18	.09	.10
20. 親といっただけで何となく安心できる。	.07	.73	-.05	.54
21. 困った時は親に頼りたくなる。	.13	.69	.10	.50
22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	.09	.68	.06	.47
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	.07	.67	.03	.45
24. 親は自分の心の支えである。	.01	.63	.05	.40
25. 何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.13	.60	.11	.39
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。	.25	.50	.01	.31
27. 親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.19	.50	-.06	.28
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.08	.00	.68	.48
29. 親の言うことには素直に従っている。	.06	.32	-.50	.36
30. 親や先生の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。	.01	-.02	.49	.24
31. 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。	.05	.35	.47	.34
32. 大人に対してひけめを感じるが多い。	.21	.05	.45	.25
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	.13	-.38	.43	.34
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信をもてない。	.27	.12	.42	.27
35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	.20	.10	.42	.23
36. どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	.38	.16	.40	.33
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.10	.29	.37	.23
固 有 値	5.37	3.86	2.66	11.89
寄 与 率 (%)	14.52	10.43	7.20	32.15

† 中学、高校、大学生全体についての因子分析の結果である。

抗・内的混乱」の尺度と命名された。なお尺度Ⅰの項目17の因子負荷量は-.36であるが、大学生男女においては高い負荷量を示したので、尺度Ⅰのなかに含められた。

なお、尺度Ⅱの「親への依存性」および尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」は、一般に得点が低いほど独立意識の高い状態を示すと考えられているが、調査Ⅱで示すように、これらの尺度間の関係はそう単純な関係ではない。したがって、以下では、独立意識の総点を算出するようなことは行わず、3尺度の結果をそれぞれ独立に示すことにする。

さらに、本尺度の信頼性係数を、尺度Ⅰ(10項目)に関しては折半法における Spearman-Brown の公式を用い、尺度Ⅱ(5項目)および尺度Ⅲ(5項目)に関して

は不等長折半法における Horst の公式 (Horst, 1951) を用いて、200名の高校生を対象として算出した結果、尺度Ⅰ～Ⅲのそれぞれについて、0.78, 0.88, 0.63の結果を得た。尺度Ⅰと尺度Ⅱは十分な信頼性が得られたが、尺度Ⅲは項目数が少ないこともあって、やや低い結果になっている。

調査Ⅱ 独立意識の発達の傾向

目的と方法 作成した独立意識尺度を中学、高校、大学生に実施し、独立意識の発達の変容と性差を明らかにする。なお、中学生については、首都圏、地方都市、農村の地域差についても分析する。本調査は都内の公立中学校(5校)2年生、都内の公立高校(2校)および私

TABLE 2 調査Ⅱ, Ⅲの対象者数

	首都圏			地方		合計
	中学	高校	大学	都市の 中学校	農村の 中学校	
男子	212	263	140	129	132	876
女子	174	160	106	119	148	707
合計	386	423	246	248	280	1,583

TABLE 3 独立意識尺度の尺度別得点†

性別	尺度	首都圏			地方		発達差††			地域差††			性差†††				
		中学(A)	高校(B)	大学(C)	都市の 中学(D)	農村の 中学(E)	A-B	A-C	B-C	A-D	A-E	D-E	A	B	C	D	E
男子	Ⅰ	M 34.24	34.35	35.19	34.17	32.20											
		SD 5.68	5.83	5.65	5.23	5.53					**	**	*		**	*	
	Ⅱ	M 14.14	13.34	13.37	14.71	14.86									**	**	**
		SD 3.89	3.92	3.80	4.11	3.35									**	**	**
	Ⅲ	M 13.90	13.05	11.86	13.57	14.46	**	**	**						**	*	
		SD 3.41	3.07	2.74	3.05	3.18											
女子	Ⅰ	M 33.04	34.06	33.19	32.71	31.64					*						
		SD 5.60	5.16	5.45	5.08	4.77											
	Ⅱ	M 14.64	15.80	15.73	16.15	16.22	**	*		**	**						
		SD 4.38	3.99	3.84	4.41	3.83											
	Ⅲ	M 13.80	11.98	11.16	13.21	13.89	**	**	*								
		SD 3.48	3.07	2.59	2.96	3.23											

† 尺度Ⅰの最高可能得点は50, 最低可能得点は10, 中間の得点は30。尺度Ⅱ, 尺度Ⅲの最高可能得点は25, 最低可能得点は5, 中間の得点は15。

†† 分散分析による多重比較。* $P < .05$, ** $P < .01$

††† t検定。* $P < .05$, ** $P < .01$

立高校(1校)2年生, 首都圏の国立大学(3校)1, 2年生を対象に実施された。また, 中学生については, 茨城県水戸市の公立中学校(2校)2年生および茨城県内の農村地帯の公立中学校(2校。保護者の過半数が農業従事者)2年生にも実施された。人数はTABLE 2に示す。調査期間は1978年12月~1979年1月である。

結果と考察 発達傾向 TABLE 3によって首都圏の中学, 高校, 大学生について独立意識の各尺度ごとの発達傾向を検討する。尺度Ⅰの「独立性」に関しては, 中学, 高校, 大学生ともに評定が高く, 発達の傾向には, 男女とも有意な変化はみられない。尺度Ⅱの「親への依存性」については, 男子では有意な発達の傾向はみられないが, 女子の場合は中学生よりも高校, 大学生の方が親への依存意識が有意に強くなるという変化がみられる。尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」については, 中学, 高校, 大学生ともに得点が低く, 発達の傾向には, 男女とも高校・大学と進むにつれて得点が有意に低くなる。

全体的な傾向として, 首都圏の青年は中学生からすでに自己の独立性が高く, 反抗や内的混乱の意識は少ない

という結果が示されている。発達の傾向には, 中学, 高校, 大学と進むにつれて反抗や内的混乱の意識がさらに低下すること, 女子においては親への依存意識がむしろ強まることが示されている。

地域差 TABLE 3に示されているように, 尺度Ⅰの「独立性」の地域差をみると, 農村の中学生の得点が低いのが特徴である。男子では首都圏および地方都市の中学生と, 女子では首都圏の中学生との間で有意差がみら

れる。尺度Ⅱの「親への依存性」については, 男子では有意な地域差はみられないが, 女子では地方都市および農村の中学生は, 首都圏の中学生よりも親への依存意識が有意に高くなっている。尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」については, いずれの地域の中学生も低い得点を示しており, 有意な地域差はみられない。

以上から, 農村の中学生の独立意識は他の地域の中学生よりも低く, 女子においては地方都市および農村の中学生の親への依存意識が首都圏の中学生よりも強いことが指摘される。

性差 TABLE 3に示されているように, 尺度Ⅰの「独立性」

の性差をみると, いずれも男子の得点が高いが, 首都圏の高校生および農村の中学生においてはその差は有意ではない。尺度Ⅱの「親への依存性」については, 首都圏の中学生を除いて女子の方が有意に高い得点を示している。尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」については, 首都圏の高校生および大学生において有意な性差がみられ, 男子の方がより強い反抗や内的混乱の意識を示している。以上から, 特に女子における親への依存性の強さが指摘される。

以上, 青年の独立意識の特徴をみてきたが, 現代青年は中学生の段階(特に首都圏の中学生)で, すでにかなり高い独立性の水準に達しており, その後はあまり急激な変化がみられないことがわかる。現代青年は実際の生活の面ではきわめて依存的であることが一般に指摘されているにもかかわらず, 意識の上では独立性が高いのが特徴といえる。この点は加藤(1977)の結果とも一致しており, 検討に価する問題である。

発達の傾向が明らかなのは, 独立性よりもむしろ, 反抗や内的混乱の減少である。しかし, 発達傾向がみられ

TABLE 4 独立意識尺度の下位尺度間の相関係数、および独立意識尺度と自己概念尺度との相関係数

				独立意識尺度		自己概念尺度					
				I	II	I	II	III	IV	V	VI
首都圏の中学	男子	独立意識尺度	I			-.31**	.54**	.18**	.32**	-.05	.16*
			II	-.08		-.12	-.03	.20**	.13	.13	.33**
			III	-.26**	-.07	.28**	-.11	-.14*	-.12	.14*	-.17*
	女子	独立意識尺度	I			-.29**	.53**	.28**	.10	-.05	.36**
			II	.05		-.08	-.02	.24**	.13	.05	.20**
			III	-.36**	-.25**	.33**	-.10	-.13	-.04	.28**	-.23**
首都圏の高校	男子	独立意識尺度	I			-.39**	.67**	.32**	.23**	-.23**	.36**
			II	-.06		-.07	-.18**	.24**	.06	.12	.26**
			III	-.26**	-.01	.25**	-.15*	-.08	-.07	.21**	-.20**
	女子	独立意識尺度	I			-.19*	.63**	.05	.32**	-.13	.08
			II	-.20*		-.17*	-.21**	.19*	-.02	.13	.25**
			III	-.24**	-.17*	.32**	-.10	-.21**	-.26**	.13	-.22**
首都圏の大学	男子	独立意識尺度	I			-.29**	.66**	.27**	.29**	-.25**	.19*
			II	-.28**		-.15	-.18*	.18*	.09	.04	.24**
			III	-.41**	-.09	.41**	-.20*	-.26**	-.23**	.22**	-.29**
	女子	独立意識尺度	I			-.11	.64**	.05	.15	-.13	.11
			II	-.05		.09	-.10	.00	.15	.04	.15
			III	-.36**	-.04	.38**	-.19	.04	-.15	.16	-.27**

* P < .05, ** P < .01

るものの、反抗、内的混乱の意識は中学生から全般に低い。このことは精神衛生的には健全な傾向といえるであろうが、自我の確立が環境の抵抗や自己内部の葛藤を主体的に克服する過程と密接に関連しているとすれば、青年の人格形成にとって必ずしもプラスばかりとはいえないであろう。

次に、女子の場合、親への依存性が中学生よりも高校生、大学生の方が高くなっており、女子においては親への依存性が必ずしも独立への障害にはならないことを示している。特に高校生女子においては、親への依存性と自己の独立性がともに強まる傾向を示し、自己の独立性と親からの独立性が直接結びついていないことを示唆している。この点は、依存性と自立性の関係についての高橋（1968）の考察とも関係し、興味深い点である。

なお、TABLE 4 によって独立意識尺度の下位尺度間の関係を分析する。まず第1に顕著なのは、尺度Ⅰの「独立性」と尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」とが負の相関関係を持つということである。これは独立意識の高い者は心理的により安定していることを意味していると考えられる。しかもこの関係は、大学生において最も強くなっている。次に、女子においては大学生を除いて尺度Ⅱの

「親への依存性」と尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」は負の相関を示している。ところが男子においては両尺度間には有意な相関がみられない。このことは女子と男子に

おける「親への依存性」の意味の相違を示すであろう。即ち、女子においては「親への依存性」は心理的安定と関係していると思われる。また尺度Ⅰの「独立性」と尺度Ⅱの「親への依存性」との間には、高い負の相関関係はみられない。したがって、独立性と依存性とが必ずしも両極概念ではないことを支持する結果といえよう。

調査Ⅲ 独立意識と自己概念の関係

目的 青年期における論理的思考の発達や社会的関心の拡大深化、身体の発達などは、青年の自己に対する認識を変え、両親や教師への依存から離脱して、自己の責任と判断において行動しようとする傾向を強めると考

えられる。したがって、自己に対する認識と独立意識の間には一定の関係が予想される。本調査ではこの両者の関係を検討する。

方法 独立意識尺度を実施した被験者に対し、高木・加藤（1979）の作成した自己概念尺度を実施し、独立意識と自己概念の関係を検討する。自己概念尺度の下位尺度は以下のとおりである。

自己概念尺度

- 尺度Ⅰ 反社会性（10項目）
- 尺度Ⅱ 意欲性・活動性（10項目）
- 尺度Ⅲ きちようめんさ・清潔さ（10項目）
- 尺度Ⅳ 明朗性・友好性（10項目）
- 尺度Ⅴ 情緒性（10項目）
- 尺度Ⅵ 誠実さ（10項目）

被験者は調査Ⅱの首都圏の中学、高校、大学生と同じであり、調査期間も調査Ⅱと同じである。

結果と考察 TABLE 4 に示されているように、独立意識の尺度Ⅰ（独立性）は自己概念の尺度Ⅱ（意欲性・活動性）と高い正の相関を有する。このことは自己の独立意識の強い者は自己を意欲的で活動的であると意識することを示し、「独立性」尺度の妥当性を実証する1つの証

拠となろう。次に、「独立性」尺度は自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）と負の相関関係を持つ。このことは独立意識の有無が社会的適応と関連することを示すものであろう。しかし女子においては、発達段階が進むにつれてその関連は薄れるようである。「独立性」尺度と自己概念の尺度Ⅳ（明朗性・友好性）とは正の相関関係を持ち、それは男子において顕著である。このことも独立意識と社会的適応との関連を支持するものであろう。「独立性」尺度と自己概念の尺度Ⅴ（情緒性）とは、男子高校、大学生においては負の相関を示しているが、女子においては有意な相関はなく、独立意識の有無が情緒性とは関係がないことを示している。以上の他、主に男子において「独立性」尺度は自己概念の尺度Ⅲ（きちようめんさ・清潔さ）や尺度Ⅵ（誠実さ）と正の相関関係を持っている。

次に、独立意識の尺度Ⅱ（親への依存性）は自己概念の尺度Ⅲ（きちようめんさ・清潔さ）や尺度Ⅵ（誠実さ）と正の相関関係を持つ。このことは親に対する依存性が親からのしつけや教育を受け入れやすくしている可能性を示すものと思われる。しかもそれは、「親への依存性」尺度が自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）や尺度Ⅴ（情緒性）とほとんど相関を持たないことから示唆される。その他、「親への依存性」尺度は自己概念の尺度Ⅱ（意欲性・活動性）とは一部において負の相関関係を持ち、自己概念の尺度Ⅳ（明朗性・友好性）とは相関関係を持たないことが示されている。

独立意識の尺度Ⅲ（反抗・内的混乱）は自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）との相関が最も強く正の相関を示し、次に自己概念の尺度Ⅴ（情緒性）および尺度Ⅵ（誠実さ）との間にそれぞれ正と負の相関を示す。即ち、反抗や内

的混乱は個人の独立性を獲得する上で必要な1ステップであるとは言っても、その時点では社会的にあまり望ましくない不適応の状況にあることを示唆している。その他、「反抗・内的混乱」尺度は自己概念の尺度Ⅱ（意欲性・活動性）、尺度Ⅲ（きちようめんさ・清潔さ）、尺度Ⅳ（明朗性・友好性）とはそれぞれ一部において負の相関関係を持つことが示されている。

以上によって、独立性は自己概念の意欲性・活動性の尺度と相関をもつこと、親への依存性は自己概念のきちようめんさ・清潔さや誠実さの尺度と相関をもつこと、反抗・内的混乱は自己概念の反社会性の尺度と相関をもつことなどが明らかにされた。

引用文献

- Horst, P. 1951 Estimating total test reliability from parts of unequal length. *Educational and Psychological Measurement*, **11**, 368—371.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造（心理学モノグラフ, 14）東京大学出版会
- 久世敏雄 1958 心理的離乳 依田新（編）家族の心理 培風館 Pp. 70—89.
- 鈴木清 1936 自我を中心とする児童の道徳に関する一研究（一）教育心理学研究, **11**, 676—695.
- 高木秀明・加藤隆勝 1979 青年期における自己概念の発達の変容(1), (2) 日本心理学会第43回大会発表論文集, 410—411.
- 高橋恵子 1968 女子青年における依存性の発達 依田新（編）現代青年の人格形成 金子書房 Pp. 21—44.

(1979年10月27日受稿)